

『浜松中納言物語』 卷三注釈（六）

浜松中納言物語の会 卷三分会

本稿は、本誌第七十三巻第一号掲載分の続稿である。会の来歴や「凡例」については第七十一巻第一号掲載の（一）を参照いただきたい。

今回は、『浜松中納言物語』巻三のうち、「常は、尽きせず世を厭ひ思したる気色のみゝいと心憂きことなりや」までの範囲（小学館新編日本古典文学全集『浜松中納言物語』二四五頁一行目～二五四頁一〇行目に該当）をこの場を借りて公表する。この間の参加者は、小笠原愛子（大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター研究員）、フィットレル・アロン（早稲田大学高等研究所講師）、星山健（本学教授、松浦あゆみ（本学非常勤講師・京都女子大学非常勤講師）、八島由香（花園大学非常勤講師）、山下太郎（元大阪府立高等学校教諭）、横山恵理（大阪工業大学准教授）の七名である。なお、各区分の担当者は以下のとおりであるが、いずれも参加者全員による討議を経たものである。

【三二】 中納言、大将大君に大式女のことを語る。（担当…松浦あゆみ）

— 底本三八才⑨、新註二四六①、大系二九六④、桜楓一二二⑦、新全集二四五①、全注釈六八一—

常は、尽きせず世を厭いとひ思したる気色のみ、なげの戯たはぶれ言にもかけ給ふを、今朝はあはれ捨てぬさまに言ひなし給へるも、いと心こころ尽くしなるに、けうらなる若き尼二人、清かろげにて、軽かろらかに装束しょうぞくきて、閑伽あか奉りなどするも、「人中納言に違ひ、さま異なる御いとなみにや」と涙こぼれておぼゆるを、

「罪中納言の深きにや侍らむ、常よりもあはれに侍りや。今朝は、乱れ心地も悩ましう侍るを。渡らせ給ひね」

とて、例の、御方に入り給へれば、人々驚き騒さわぐ。

「とく渡らせ給へ」

と、せめて度々あれば、せめて洩らむも、さばかりにては、世の常びうたてければ、渡り給ひて、三尺の御几帳なほ絶えず引き隔て給へる、押しやりて、近やかにうち添ひ臥し給ひて、大式おほしきの娘のことは、語り聞こえ奉りにしかば、今宵のうたたねに、飽かざりつるほととぎすの声のことなど、残ることなく語り聞こえ給ひて、

「世中納言の常のありさまにて待ち受け給はましかば、ありつかぬかやうの振る舞ひなどは、思ひ寄り侍らざらましと思ひ侍りつるに、かき乱り悩ましくさへなりぬ」

とかこちて、御足などうちすさませて、御傍かたはらに御殿籠りたる。

注釈

○常は、尽きせず世を厭いとひ思したる気色のみ、なげの戯たはぶれ言にもかけ給ふを——大将大君はひたすら、通常つぎょう（の中納言と

の会話)においては、俗世をこの上なく厭わしくお思ひになつてゐるようなことばかりをほんの冗談においても漏らしなされるのに、の意。「かく(掛く)」は、言葉を掛けること。ただし、「気色」を「掛く」の表現は異例。

○今朝はあはれ捨てぬさまに言ひなし給へるも―前区分【三〇】で大将大君が中納言に「うきながら」詠を返歌したごと。同歌において、「とまる心もありなまし」が、この世での中納言との関係に執着する気持ちはあつただらう、の意に解せることにつながる。

○けうらなる若き尼二人、清げにて、軽らかに装束きて―「若き尼二人」は、大将大君と共に剃髪して出家生活を送つてゐるお付きの女房たちのこと。仏道修行を送る「けうらなる(≡清浄な)若き尼二人」が「清げ(≡清慧)」な様子で夏の法衣を「軽らかに装束き」てゐる美を表す(全注釈)語注。

○「人に違ひ、さま異なる御いとなみにや」と涙こぼれておぼゆるを―「人に違ひ、さま異なる」は、「けうらなる若き尼二人」に体现される、「人」≡俗世の通常の女性とはかけ離れた大将大君たちの勤行生活に対する中納言の違和感を表したものが。逢瀬を交わした大式女に続き、大将大君に対しても愛執を求める中納言には、大将大君たちの勤行生活が今は受け容れられないように感じられ、「涙こぼれておぼゆる」のである。

○罪の深きにや侍らむ―この場合の「罪」は、仏教上愛執の深さに対するもので、前区分の和歌の贈答でかき立てられた大将大君への愛執を省みた言葉。

○例の、御方に入り給へれば、人々驚き騒ぐ―前区分【三〇】以来、御堂で「簀子の長押に押しかかりて居」た中納言がいつものように、「端近う柱に寄り居」る、尼となつた大将大君の「御方」にまで不意に入つて来なされるので、大将大君付きの女房たちが驚いて騒いでゐる。巻二では【二八】の帰京直後の再会時にも来訪を取り次いで入る宰相の君の後に「やがて続きておはしにけり」といきなり行動を取つて宰相の君に驚かれ、同巻【三二】の昼間にも、「ゆくりなう入りおはしましたるに、人々もあきれぬ」とあり、やはり当該箇所と同様の反応を見せてゐる。なお、(新註)〈大系〉(全注釈)は「例の御方」と取り、大将大君の通常の居室と解す。

○とく渡らせ給へ―中納言は大将大君に、ただ今勤行をしている御堂から、自分たちの居室へ早く一緒に行くよう、重

ねて促している。本動詞「渡る」は作中全八十三例。このうち渡唐・渡日を表す行爲は五十二例と圧倒的に多い。ただし、本作品では、御堂との間を大君や中納言が移動する場合も、当該場面以外に用いられている。二人の勤行生活が始まった当初、卷二【四〇】に、この御堂が「えも言はぬ堂のめでたき、(中納言邸とは) 別に建て添へ」て造営され、「もろともに」に仏の御前に渡り給ひて、後夜起きて行ひ給ふ折」が描かれていた。他にも卷三【四〇】、卷四【四二】で御堂への移動の描写に用いられる。

○せめて度々あれば、せめて洩らむも、さばかりにては、世の常びうたてければ―中納言からは強引に度々居室へ一緒に行くよう催促があるので、大将大君もその都度同じように強引に居室を洩るというのは、(このような剃髪の状態では)在俗の女君の振る舞いじみて情けないので、の意。「せめて」の反復は、中納言の重ねての催促にすぐには応じない大将大君の様子を示す(〈全注釈〉)。「さばかりにては」は、大将大君自身がそんなに度を過ぎて行き洩っているのではとする(〈新全集〉・〈全注釈〉)の解に従うが、他に、中納言からそれほど強いて勧められたのではとする解(〈大系〉)などもある。

「世の常ぶ」は、世間一般のように振る舞うこと。「世の常びうたてければ」は、この場合は剃髪の自分が在俗の女のように振る舞うことに対する否定的な心情である。【五八】で吉野尼君は娘吉野姫君には「世の常びたる住まひ・ありさま」を望んではいないと、中納言に語っている。世俗の人の行動様式を取らないと考える点では共通する。なお、「うたてければ」については(〈大系〉補注で、『源氏物語』に形容詞的用法の例が見えないことから「うたてあれば」の誤写を疑うが、『うつほ物語』蔵開上にも「いとうたてくなむ」の形容詞的用法の例は見られる。

○渡り給ひて―大将大君は、「とく渡らせ給へ」項前掲の卷二【四〇】と同じく中納言と「もろともに」、ただしその場合とは逆に、御堂から中納言本邸へ戻ることになる(廊伝いか)。

○三尺の御几帳なほ絶えず引き隔て給へる、押しやりて―中納言は、これまでも毎日寝起きを共にする勤行生活では当初から、大将大君が几帳越しに對しようとするのを、几帳の隔てを取り払って直接間近に接してきた。卷二【三九】で「朝夕さし並びたるやうにて、絶えず引き隔て給ふ御几帳なども押しやりて、向かひ聞こえ給ふに」と振る

舞っている（全注釈）掲出例）。なお、「引き隔て給へる」を諸注では「引き隔て給へるを」に校訂するが、（大系）補注の別解通り底本文のままでも意は通るのである。当該箇所のように連体形に助詞を付さないで目的格とする作中例は、【五六】～【五七】の「言ひ続けてうち泣い給へる、聞くに、いみじうあはれにかなしう」がある。

○近やかにうち添ひ臥し給ひて―剃髪の大將大君に対しても、できる限り通常の男女関係のように近く寄り添おうとする中納言の様子。（全注釈）は、『源氏物語』胡蝶巻で光源氏が玉鬘に「近やかに臥す状態との類似を指摘する。

○大式の娘のことは、語り聞こえ奉りしかば―中納言は大將大君に対しては、帰国後の再会以来「心のとまり」として尊重し勤行生活を共にする中で、自分の体験の全てを隔てなく語らっている。その一環で、帰国直後の筑紫滞在時に添い臥した大式女のことも話しているであろう。巻二末近くの【四三】の時点において、帰国後も思慕を覚える唐后のことだけは語れないという文脈ではあるが、「尼姫君には、この世のこともかの世のことも残りなく、長き寝覚に聞こえ尽くい給ふ中に」と対していた。次項参照。

○今宵のうたたねに、飽かざりつるほととぎすの声のことなど、残ることなく語り聞こえ給ひて―【二九】で中納言自身が大式女との後朝の別れの時「折あはれにをかし」と感じた和歌的情趣溢れる景物として、月光に「端近き橋の匂ひ」が漂う中で「ほととぎすうち鳴きたる」声のことまでを全て、大將大君に語っている。

主人公が正妻格の女君に対し、下位の女君との様々な出来事を情趣深く語って誠意を示すと共に、嫉妬も煽ろうとする（隔てなき語らい）のあり方として見た場合、『源氏物語』濡標巻で帰京後の光源氏が紫上に対して明石の君とすることを語る趣向を踏まえている可能性が高い（【二八】の「思ひかけず……煙の口惜しさを」項も参照）。ただし、本作品の中納言の場合は、和歌的な情趣を大將大君と共に享受し、情趣深く語る情動の中で、剃髪の身である大將大君への果たせない愛執を発散しようとする傾向が独特である。松浦あゆみ『浜松中納言物語』唐后をめぐる中納言の言いつくろい考」（『論究日本文学』五四 一九九一年五月）参照。

○「世の常の……かき乱り悩ましくさへなりぬ」とかこちて―「かこつ」は、『新全集』の指摘する通り「ほかのせいにして愚痴などこぼす」の意。ここでは、大式女との逢瀬に及んでしまうのは、あなた（大將大君）が私（中納言）の

帰国を待たずに出家してしまふ俗世の女性のまま夫婦関係を持つてくれないせいだと思うと、心の乱れ・悩ましさまでも起こるのだと、大将大君に責任を転嫁して口説いている。当初の「罪の深きにや侍らむ、……乱れ心地も悩ましう侍るを」と訴える言葉においては、彼女への愛執の「罪の深さ」を省みるかのような語調だったのを考えると、対照的な態度である。

○世の常のありさまにて待ち受け給はましかば―本意ではない大式女との逢瀬に走ったことについての言い訳。中納言は巻二【四一】の勤行生活においても、大将大君の剃髪してもなお理想的な女性としての様子に、「例ざまの世の常にあらまじものを」と、「口惜しう悲し」く思っていた。

○ありつかぬかやうの振る舞ひなどは、思ひ寄り侍らざらまし―「ありつかぬ」は、性に合わない、の意。「ありつかぬかやうの振る舞ひ」は、中納言自身が自負している元来の禁欲的な性質には合わない、意中の大将大君以外の女性(大式女)との逢瀬のこと。他の女性との逢瀬など思い寄らなかつたものを、と言いつつ諷するのである。

○御足などうちすさませて―中納言が、お付きの女房に、なぐさみに足を揉みさすらせながら、くつろいだ体勢で休息している様子。「うちすさむ」が、なぐさみに……する行為を漠然と表し(「ものす」と同様の用法で、「うち」は接頭辞)、「すさぶ」「すさむ」と同義(『日本国語大辞典』第二版では、『浜松中納言物語』当該例や『夜の寝覚』の後掲例を掲出)。この場合は「足」を「うちすさます」文脈により、なぐさみに足を揉みさすらせる意になる。この場面では言及がないが、女房が居合わせている設定か。(大系)では「ひたすらし通す」と「なぐさみにしする」の意味合い両方の可能性を併せて示すが、後者と解した。「うちすさむ」に、「打ちすさむ」||ひたすら打つの意が見出される用例は、中世期以降の擣衣とぎいなどの和歌からである。

「うちすさむ」「うちすさぶ」の本作品成立期の用例は、『狭衣物語』二例(第一系統深川本本文、和歌や引用歌句を「うちすさむ」)、『夜の寝覚』一例(男が女に一度追つただけに留め「うちすさぶ」が管見に入るのみだが、それぞれの前後の文脈に応じて具体的な言動に解せる)。

なお、類似語「足参る」の用例において、召人的な女房による性的な奉仕の意味合いも考えられるものとしては、

卷二【一二】の大宰大弐が娘を中納言に添い臥しさせる際に、「御足参らせさせ給はなむ」と告げている言葉がある。当該箇所においても、「別の意味を含んでいそうにも思える」という〈全注釈〉の指摘があるが、大将大君も同席のたぬ単なるマツサージであろう。また、〈新註〉は、尼姫君にもあそばせて、の意とするが、上流貴族の女性でしかも剃髪の身ではあり得ないであろう。

○御傍らに御殿籠りたる―先程、大将大君に対して「近やかにうち添ひ臥し給ひて」語っていた状態のまま、就寝をしたのである。

【三二】大弐女、中納言の後朝の文に墨を塗る。

(担当…横山恵理)

―底本三九ウ①、新註二四七⑩、大系二九七⑤、桜楓一二三③、新全集二四六⑧、全注釈六九〇―
かしこには、大弐邸の人々「衛門の督の、さばかり飽かぬ気色にて、出でわづらひ給へれば、立ち帰りおはしにけり」と心得て、北の方にも聞こゆれば、いとうれしげにうち笑みて、

「大弐北方めでたからむ人の心も、とどめざらむは、何かはせむ。大弐のいみじきことに思ひ聞こえ給へる人に、いづくかは、これは劣り給へらむ」

などのたまふを、娘は胸いとどつぶれて、「大弐女聞きや合はせられむ」とわびしければ、例ならず起き出で、いざり出でたるに、衛門の督の御文取り入れたるも、まづ、「大弐女人や見む」と心の騒げば、ふと取り給ふを、人々は例ならずと見る。

「衛門督夢にさへ見え給へるに、おそはれつつ」と書き、

「衛門督一声にあかすと聞きし短か夜も秋の百夜の心地こそすれ

とあるを見も果てず、硯引き寄せて、上をいと黒う書き乱り、紛^{まき}らはかい給ふほどに、母北^①の方渡り来て、

大式北方「いつのほどにありける御文ぞとよ。ものぐるはし。あまりいとかかるもいかが」

と、後ろめたうあるわざなれど、心地よげにうち笑ひ給ふに、面^{おもて}さと赤みてうつ臥したるに、こぼれかかる髪のかかり、髪^{かみ}ざしなどのいとをかしげなるを、少しもの思し知らむ人の、いかでかをろかには思されむ。中納言の、さばかり心ざし見せしを、心強う見とどめ給はずなりにしかば、なほ今に胸苦しうねたく思ひけり。御返りなど責むれば、書かむともなきに、取りて見給へば、せむ方なくて、

大式女「心地悪し」

とて臥しぬるを、

大式北方「いで、あやし。など聞こえ給はであるべきぞ。大式の御心にも、いとよう似給へるものかな。すずろなる人に心をつけて、ゆゑもなうよしなきことをし出でられたりしよ」

と、うちむつかり給ふを聞く、心地悪しきまでむつかしうて、聞き入れぬやうなれば、言ひわづらひて帰り給ひぬ。

〔校異〕①母北の方渡り来て、「いつのほどに―底本ナシ

注釈

○かしこには―大式女のところでは、の意。これまでは中納言と大将大君との関係が語られていたので、場面転換が明示される。

○衛門の督の、さばかり飽かぬ気色にて、出でわづらひ給へれば―衛門督が、心残りな様子で自邸（大式女のもと）から出かけなさったので、の意。具体的には書かれていないが、【二七】に相当する時点の様子。なお、〈桜楓〉では、この「衛門の督」とは中納言の姿であり、中納言を衛門督だと勘違いした人の視点で書かれているという説も示している。

○立ち帰りおはしにけり」と心得て―大式女の女房たちは、真夜中の〈男〉の大式邸来訪を衛門督が立ち戻っていらっしやったのだと考え、大式北方に報告する。ただし、【二七】同様、女房の勘違いであり、実際に通ってきたのは中納言である。『源氏物語』浮舟巻で匂宮が薫を装って浮舟の寝所に忍び込んだ場面を想起させる。

○めでたからむ人の心も……劣り給へらむ―申し分ない人であっても、通ってくれなければ何になろうか、大式が素晴らしいとお思い申し上げている中納言に比べて、衛門督はどこが劣っているのか、の意。大式北方にとって真に「めでたからむ人」とは、心にとめて通ってくれる人であることが示される。「これ」とは衛門督のことであり、自分の娘に熱心に心をとめる衛門督は、中納言と比べてどこが劣っていらっしやるのでしょうか、どこも劣っていらっしやらない、と主張する。大式北方が、娘と夫との共通点を見出し、大式への不満を語る様子は、本区分末尾にも出てくる。

○聞きや合はせられむ―聞き合はす」は、あれこれ聞いて、考え合はす、の意。ここでは、大式女が、何かをきっかけにして、中納言と密会したことが知られてしまうのではないかとつらく思っていることを示す。『源氏物語』浮舟巻に「離れぬ御仲なれば、つひに聞きあはせたまはんこといとうかるべし、すべて、いかになりけむ」とあり、薫と匂宮双方に浮舟が通じていたことが、知られてしまうのではないかと危惧する本文で用いられている。

○衛門の督の御文―本注釈では、文字通り衛門督が記した文と解す。三角洋一「御津の浜松」私注」（平安文学研究）六〇 一九七八年十一月）の解釈（以下、三角説と示す）に従う。〈新註〉〈大系〉〈新全集〉〈全注釈〉はこの文を、衛門督からの文のように見せかけた、中納言からの後朝の文とする。以下の項目で、衛門督の文と解する理由を必要に応じて記す。

○「人や見む」と心の騒げば、ふと取り給ふを、人々は例ならずと見る——大式女への文は衛門督の従者から届けられたはずで、周囲もその文を衛門督からのものと認識していたと推測される。文の内容を他人に知られると、昨夜の訪問が衛門督ではなく中納言だったことが露頭してしまつたため、大式女は人に見られないように慌てて受け取るのである。あるいは、衛門督に他の男との密会を悟られたのではないかと危惧したか。大式女が衛門督からの文を慌てて受け取つた様子を見て、周囲の人々は「例ならず」、つまり、いつものような(文を見向きもしない)態度とは異なると思へたのである。

○「夢にさへ見え給へるに、おそはれつつ」——衛門督は大式女を夢に見て漠然とした不安に襲われている。ここで、三角説は、他の男性と密通すると夫の夢に出てしまつという俗信を『とはずがたり』の用例を挙げて紹介する。それを前提にするならば、この夢は中納言との密通を暗示しているのである。この文を読んだ大式女は、密通の露頭に怯える。○「一声に……」の歌——衛門督の和歌。ほととぎすの一声で明けてしまつて、名残惜しく思う夏の短夜も、逢わなければ、秋の百夜を重ねたような思いがする、の意。本区分冒頭で語られたように、衛門督が名残惜しそうに大式女のもとを離れたことで、たつた一夜逢わないのを大変つらく感じる心情が示される。なお、恋人に逢わないときの夜を千夜と感じる例としては「君みねばほどなくあくる夏の前も一夜もちよにおとらざりけり」(尊経閣文庫本『定頼集』一六九・詞書「ある人にもいひたるつとめて」)がある。

衛門督の和歌の「一声にあかずと聞きし」には、「夏の夜のふすかとすればほととぎすなくひとこゑに明くるしのめ」(『古今集』卷三・夏・一五六・紀貫之)、「暮るるかと思ればあけぬる夏の夜をあかずとや鳴く山ほととぎす」(『古今集』卷三・夏・一五七・忠岑)などが念頭に置かれている。ここでは、ほととぎすの一声で明けてしまつ夏夜の短さを、秋の百夜と捉えることにより、大式女と逢えない嘆きが強調されている。

〈新註〉〈大系〉〈新全集〉〈全注釈〉はこの和歌を、中納言からのものとするが、一夜をともした男女なら、その夜を短く感じた詠むのが常道であり、例歌として、「秋の夜も名のみなりけり逢ふといへば事ぞともなく明けぬるものを」(『古今集』卷一三・恋三・六三五・小野小町)、「長しとも思ぞはてぬ昔より逢ふ人からの秋の夜なれば」(『古

今集』卷一三・恋三・六三六・凡河内躬恒)が挙げられる。大式女と逢った中納言が、当該歌のように「百夜」という表現を使うのは、不自然。ここでは夜を長く感じたたと詠んでいるのだから、詠者は昨夜を彼女とほとんどともにしていない男(＝衛門督)であろう。

なお、〈全注釈〉〈新全集〉にすでに指摘があるが、「秋の百夜の心地」の表現は『更級日記』の「明くる待つ鐘の声にも夢さめて秋の百夜の心地せしかな」と共通する。ただし、『更級日記』の和歌は、父孝標が任官の除目を待ちわびた夜の長さを表し、本作品で、男女が過ごした夜の長さを表した用法とは異なる。

○見も果てず、硯引き寄せて、上をいと黒う書き乱り、紛らはい給ふほどに―文を見終わらないうちに、大式女が硯を引き寄せて、文字の上からたいへん黒く乱れ書きのように重ねて、誰からの文か分からないようにした。衛門督の文を見られると、その文面から、中納言との関係が明るみになるのではないかと危惧し、大式女が慌てて消したのである。

○母北の方渡り来て、「いつのほどに……あまりいとかかるもいかかか―」母北の方渡り来て……いつのほどに」まで底本にはない。「母」の前部分の「ほどに」と、「いつのほどに」の「ほどに」の目移りによる誤写か。「いつのほどに」以下、大式北方の言葉。「かかる」とは、大式女が文を黒く塗りつぶしていることを指すとする説(〈新註〉〈大系〉〈新全集〉〈全注釈〉)と、衛門督は頻繁に文を寄こすほど愛情が深い、かえってすぐに飽きてしまうのではないかと大式北方が呆れているとする説(〈桜楓〉)がある。墨塗りに気が付いたのは、後文の「取りて見給へば」の段階と解し、ここでは後者の説をとる。

○後ろめたうあるわざなれど―将来の愛情が不安視されるものの、の意。

○心地よげにうち笑ひ給ふに―大式北方の様子。大式北方は、衛門督が頻繁に文をよこす様子を見て、当面の深い愛情に満足している。

○面さと赤みてうつ臥したるに―大式女が、顔を急に赤らめ、うつ臥す様子。中納言との関係を、衛門督や母に知られてしまうことを恐れている。うつ臥すことよって手紙を隠したか。「面さと赤む」の語句は、『源氏物語』浮舟巻で、

浮舟が匂宮とも契りを交わしていたことを薫が知っていたのではないかと、右近に指摘された時に、浮舟が「おもてさと赤みて、ものものたまはず」となった場面で用いられている。

- さばかり心ざし見せしを……胸苦しうねたく思ひけり―かつて筑紫で、大式女を中納言に差し出したにもかかわらず、中納言はつれない態度をとったことを指す。大式北方は、自分たちの厚意を中納言がないがしろにして、前文に書かれていたように魅力的な大式女との婚姻関係を最後まで結ぼうとしなかったことをいまいましく思っているのである。
- 御返りなど責むれば……「心地悪し」とて臥しぬるを―大式北方から、衛門督にお返事を書くように責められては、衛門督からの文を取り上げられた状態では、墨塗りを咎められたうえに、あれこれ詮索されるといふ恐れからか、大式女は「心地悪し」とうつつ伏すのである。中納言との密通にやましさを感じる大式女は、衛門督からの文に返事のしようがない。なお、「取りて見給へば」の時点から、大式北方が衛門督の文を初めて見て、墨塗りの状態を確認したと解した。

類似する場面として、『源氏物語』浮舟巻「人や見むと思へば、この御返り事をだに、思ふままにも書かず」がある。ここでは、誰かに見られることを恐れて匂宮からの文に返事をしない浮舟の様子が描かれている。このような区分と似通う表現が、入水前の浮舟にいくつも見られる。本作品が大式女を描く際、同じく二人の男性と関係を持った浮舟を意識していることが窺える。

- 大式の御心にも、いとよう似給へるものかな―大式北方の心情。夫と娘の性格がとてよく似ていると、娘の衛門督に対する態度を見て文句を言っている。二人が中納言に気持ちや寄せていることが、衛門督の方を好ましく思っている大式北方にとっては面白くないのである。

- すずるなる人―いい加減な人、の意。ここでは中納言のことを指す。大式北方が中納言を快く思っていないことが一貫して表される。

- ゆゑもなうよしなきこと―墨を塗るといふ理不尽な行為。

- うちむつかり給ふを聞く……言ひわづらひて帰り給ひぬ―大式北方が中納言の悪口をおっしゃるのを、大式女は煩わ

しく思い、また、中納言との関係が露呈するのを心配し、話を聞き入れないでいる。そのため、大式北方が根負けして自分の部屋にお帰りになった。「心地悪しきまでむつかしうて、聞き入れぬやう」は、大式北方から見た娘大式女の拒否的な態度を指す。

【三三】 中納言、大式女からの返歌を大将大君に見せる。

(担当…小笠原愛子)

— 底本四一才①、新註二四九④、大系二九九①、桜楓一二四⑤、新全集二四八⑩、全注釈六九七—
夕方になりてぞ、この人の御文は、いと忍びてある。

中納言 思ひやる方こそなけれ暮るる間を嘆きやすべきなほや待つべき

何となく心あくがれ乱れ暮らすに、うち泣かれて、

大式女 仙河せんかはにおろす筏いかだのいかにも言ふべき方もなくぞなかる

とあるを、心ざしのあればにや、まことに浮かぶ心地して、忍びて女君に見せ奉り給ひて、

中納言 「心苦しきはひのしたれば、すさまじうもおほえぬを。え避らぬ仲に、もし漏れ聞こえば、

いと恐ろしう便なかるべし。さりとてかくてやみなばあはれなり。この方に潮染しほじみたる人

は、いかなるも心安げなり。ありつかぬかやうのことは、所狭ところせうこそありけれ」

と語らひ聞こえ給へば、大将大君 「いとほし」と思ひて、

大将大君 「かからざらむ先にこそは、いざなひ給ひてましか」

とのたまふ。ことわりなれば、

中納言 「これも誰ゆゑぞ。内々うちうちこそかう背き果てられ奉りたれ、人聞きに、また人を並べ奉らじと

思ひ侍りしぞ」

とのたまへば、ただ御顔のみ赤くなりわたりて、ともかくも聞こえ給はぬ用意もてなし、なほ
いとかばかりなるは、この世にありがたうこそとうちまもり聞こえ給ふに、御胸つぶつぶと鳴
る心地せられ給ふ。

〔校異〕①すさまじう―底本「すまじう」②はぬ用意もてなし、なほいとかばかりなるは、この世にありがたうこそとうちまもり

聞こえ給ふに、御胸つぶつぶと鳴る心地せられ給ふ。―底本ナシ

注釈

○夕方になりてぞ、この人の御文は、いと恐びてある―夕方になってから、中納言の御文は、嚴重に人目を憚って届けられる、の意。強意の「ぞ」によつて、「この人」つまり中納言の「御文」が、衛門督の文に比して遅かったことが強調されている。【三二】で解釈したように、「一声に……」を衛門督の歌と考へ、中納言の後朝の歌の遅さが、対比によつてより強く印象づけられていと読む。なお、〈全注釈〉は、この「ぞ」の強意を、「本来なら朝方に届けるべきものであつた」後朝の文が、夕方に届けられるという「本来の作法にもとる」ことを「言外におわせ」るものとす

る。○「思ひやる……」の歌―思ひを遣る「方」、恋しい思ひの遣り場がありません、暮れるまでの時間を、ただ嘆いていまいしょうか、やはりそれでもあなたとの次の逢瀬を待っていますか、の意。「方」は方角、場所。「思ひ」を「遣る」べき「方」がないということは、晴らす方法がないことに繋がる。

「思ひやる方こそなけれ」で始まる歌はこの時代以降多いということが、〈新全集〉頭注に指摘されている。ただし、当該の初句・二句を持つ平安期の歌は五首のみで、本作品以外で最も古いものは『成尋阿闍梨母集』（最も新しい記事は一〇七三年）の、息子が筑紫への舟に乗ったことを知った際の詠歌「おもひやるかたこそなけれあまをぶねのりすてらるるうらみするよに」（一一六）である。

さらに「なげき」も含む例として、同じく『成尋阿闍梨母集』に、入宋した息子を思う「やまとなるわがなげきのみしげりつつからきおもひぞやるかたもなき」（二二九）がある。

○何となく心あくがれ乱れ暮らすに、うち泣かれて―主語は大式女。中納言との逢瀬により心が定まらず乱れていたところへ、後朝の文を見て泣いてしまったのである。なお、前田尊経閣文庫蔵本を底本とする（全注釈）は、「うち泣かれて」部分を、「うち嘆かれて」とする。

○「杣河に……」の歌―恋しい思いを遣る「方」もない、とあなたはおっしゃいますが、私のほうは、杣河におろす筏が行く当てもなく流れるような不安な状況で、「いかに」と言うべき「方」、「どうしたらいいのか」と相談できる人さえおらず、泣いてしまっています、の意。

先の中納言の歌の「思ひやる方」を受け、私の方こそ「言ふべき方」もないのだと返している。「方」は、ここでは相談できる相手、人を指す。また、「流るる」は「泣かるる」を掛け、「河」「筏」「流るる」は縁語である。「杣河におろす筏の」は「いかに」を導く序詞。後代の例ではあるが、『千載集』に同じ語句を序詞に用い「浮き」を導いて、不安定な身の上を「杣河におろす筏」のようであると喩えている歌、「そま川におろすいかだのうきながらすぎゆく物は我が身なりけり」（巻一七・雑中・一一二）が見られる。

○心ざしのあればにや―語り手の推測を述べる挿入句。中納言が「まことに浮かぶ心地し」た理由を、大式女をいじらしく思う気持ちがあったからであろうか、と述べている。中納言についてなので、「御心ざし」とある方が自然。

○まことに浮かぶ心地して―足許がさだまらないような不安定な感覚をいうと考えられる。《新全集》は「浮ついた軽々な気持」と注するが、大式女が「杣河に……」の歌で、浮かぶ「筏」のような不安な状態を嘆く気持ちを詠んだのを受けて、彼女に「心ざし」がある中納言も共感し、「まことに」「浮かぶ心地」がした、と解した。

「浮かぶ心地」の作中例は、この他に、中納言の帰国直後の心情を述べる「河陽県の御あたり（＝唐后）のことは、ただかけても片端思し出づるに、わが身も浮かぶ心地して、いとわびければ、行方も知らず果てもなく、むなしき空に満ちぬばかりに眺め入り給へるに……」（巻二「一一」）のみ。直後に続く文言からも、不安を述べていると考えら

れる。当該箇所も同様に解してよいであろう。

○忍びて女君に見せ奉り給ひて―「女君」は、大将大君。中納言は、大弐女からの返歌を、正妻格の人として最も信頼する大将大君にこっそりと見せるのである。大弐女との初めての逢瀬を報告した【三二】と同様の行為である。

○心苦しきはひのしたれば、すさまじうもおぼえぬを―(大弐女の様子が)いたわしい感じだったので、(自分として)興醒めには思われなかった(ので関係を持った)のですが、の意。中納言が大弐女と関係をもった理由を弁解している言葉。〈新全集〉の解に従う。なお、〈全注釈〉は、「心苦しきはひのしたれば」を、後文の「いと恐ろしう」以下にかかると解す。

○え避らぬ仲に―私(＝中納言)にとつて避けられない仲の人(＝衛門督)に、の意。「え避らぬ仲」を、大弐女と衛門督の夫婦関係とする注もある。しかし、中納言は、大弐女と密会した際【二九】にも、「まるより衛門の督はおとなしうものしきを、またえ避らぬ仲の、わきて親しう頼み交はずに」と述べており、ここで衛門督と「え避らぬ仲」なのは中納言である。当該箇所も、叔父と甥であり、行き来も多いことをそう述べたのであろう。

○かくてやみなばあはれなり―このままで(大弐女との関係が)終わってしまったらとても残念です。発言者中納言自身の未練の表明。〈新註〉〈全注釈〉に従う。仮定表現で将来の自分の気持ちを予想している例としては、卷一【一六】、唐后が中納言の帰国後を思う、「この人帰らなむ後、見ずなりなむこそ、あはれなれ」という述懐がある。一方、〈大系〉は「しみじみ気の毒だ」、〈新全集〉は「いかにも心にしみてかわいそうです」と訳しており、いずれも中納言の大弐女への同情とするが、ここは中納言が自身のことを述べている文脈であるので、本注釈ではとらない。

○この方に潮染みたる人―男女関係に慣れている人。「潮染む」は、慣れている、手練れである、などを意味する。卷二【五】では、中納言から大将大君宛ての手紙を見た父左大将が、「この道に潮染みて、ひとへになほざりの頼め言など、ことよく言ひ続け給ふべき人にもあらざるを、むげに浅からむには、かかる言の葉をば、よにあらはかい給はじかし」と、うち置きがたう見給ひて」という感想を抱いている。「潮染み」ている人はいい加減な思わせぶりの言葉を弄するが、中納言はそうではないと述べており、「潮染み」ていることが、不誠実さを示唆するような使われ方であ

る。当該例も同様であろう。

人物について「潮染み」ていると述べる例は、これ以前にも見られる。例えば『源氏物語』夕顔巻では、夕顔の怪死という緊急事態に臨んで源氏の傍らで対処する惟光について、「さ（＝惟光は頼りになるとは）言へど、年うちねび、世の中のあることとしほじみぬる人こそ、ものをりふしは頼もしかりけれ、いづれもいづれも若きどちにて」と、年長者で「潮染み」ている人は何かの時には頼りになるが、あいにく源氏同様に惟光も若かったことが述べられている。ここでは、「潮染み」ていることは、ものごとに通じて頼りがいのあることを意味しており、本作品とは大きく異なっている。

なお、〈全注釈〉は、「潮染みたる人」は衛門督のこととする。

○ありつかぬかやうのことは、所狭うこそありけれ―自分は恋愛関係に慣れていないので、煩わしく感じる、の意。中納言は、自分は色恋の方面には「ありつかぬ」と自認している。【三二】でも、中納言は、大将大君に向かって、禁欲を旨とする自分にとって大式女との関係は「ありつかぬ」ことであると述べている。

○「いとほし」と思いて―大将大君が、中納言を気の毒に思った。

○かからざらむ先にこそは、いざなひ給ひてましか―このようなこと（＝大式女と衛門督の結婚）にならないうちに、連れ出さずしてしまえばよかったのに、の意。この大将大君の発言は、自身が剃髪の身であることを前提とした上で、中納言の女性関係に対する鷹揚な態度の表明でもある。

○これも誰ゆゑぞ―これ（＝ぐずぐずしているうちに、大式女が衛門督と夫婦関係になってしまったこと）も、誰のためだと思ひですか、私はあなたの立場を気遣ったが故に、大式女をさつさと自分のものにするのをためらっていたのですよ、の意。

○内々こそかう背き果てられ奉りたれ、人聞きに、また人を並べ奉らじと思ひ侍りしぞ―内実はこのように（剃髪してしまった）あなたからすつかり背かれてしまっておりますが、私は、あなたの世間体に配慮して、他の女性を妻にすることはするまいと思つたのですよ、の意。中納言は、大将大君の立場を慮ったが故に、他の女性（大式女）を妻に

することは憚ったのだと、他ならぬ彼女への愛情に基づく自分の深慮を理解せず、他の女性との結婚を勧める大将大君に、あてこすりを言っている。

○ただ御顔のみ赤くなりわたりて、ともかくも聞こえ給はぬ(大将大君は)ただお顔一面を真っ赤にするだけで、何とも申しあげなさらぬ、の意。「わたる」を空間的な連続ととり、(全注釈)同様に「一面」と解した。中納言からあてこすられた大将大君は、負い目を感じ、自分が剃髪をした身でありながら中納言の正妻のような立場と見なされていることを意識して恥じらっている。大将大君の善良さを示す描写といえよう。

底本は「ともかくも聞こえ給」までで、「はぬ用意もてなし」以下、【三四】冒頭部の「心を交はし聞こえ給」までがない。四・五行分の本文が脱落しており、このままでは意味が通らないので、他本により補う。ともに「聞こえ給」とあったことによる目移りか。

○この世にありがたうこそとうちまもり聞こえ給ふに、御胸つぶつぶと鳴る心地せられ給ふ―中納言は、大将大君を、めつたにないほど素晴らしい人だと思いつつ見つめているうちに、胸がどきどきと高鳴ってくる、の意。中納言が、顔を赤らめて恥じ入っている大将大君の姿に魅力を感じている。

大式女からの歌についての場面であるにもかかわらず、大将大君との夫婦としての睦み合いを描き、中納言の大将大君への評価を語って終わっている。「つぶつぶと」は、細かな感じ、丸い形を言う場合にも使われる擬態語だが、「胸」が「鳴る」様子の描写にも用いられる。本作品と時代の近い同様の用例として、『狭衣物語』卷一、「狭衣は、源氏宮の姿を」見たてまつりたまへるたびごとに、胸つぶつぶと鳴りつつ、うつし心もなきやうにおぼえたまふ」がある。同語の研究史は(全注釈)に詳しい。

【三四】衛門督、大式女の件を中納言に相談する。

―底本四二オ①、新註二五〇⑧、大系三〇〇③、桜楓一二五②、新全集二五〇③、全注釈七〇一―

(担当…星山健)

① それより後、ひまいとありがたくて、男も女も、かたみにあはれと心を交はし聞こえ給ひながら、行き会ふこといかたし。わづかに夕暮れの紛れまき、宵のほどほどは、夢の浮橋の心地して、あはれに思し出でらる。衛門の督わざと来て、

「かうかうのことなむ侍る。年ごろになりぬる人を置きながら、かかるありさまを人もあやしと、必ず思ひ侍らむと思ふ思ふ、さるべきにや、これも過ぐさむことに思ひ紛らはしてやむまじく、さりとして、持て出でて通ひ侍らむも、たづきなく寂しき逢あひまのものならば、さても侍りぬべし。豊かなるたづき求め顔に、ねぢけがましきに、長らへ侍らば、とてもかくても同じことなるべけれども、大殿の対になむ迎へてむと思ひなりにたる」

と、うらもなう言ひ合はせ給ふも、いとほしければ、さりげなうて、「たちまちに迎へ給はむも、世の音聞き、今少し顕証②けんしょうに、もて出で顔にこそあらめ」と聞けど、いみじう心入れて思ひ給へることを、「悪しかななり」と聞こえむも便なければ、

「げにもさもあり」
と聞こえ給ふ。

〔校異〕①それより後、ひまいとありがたくて、男も女も、かたみにあはれと心を交はし聞こえ給ひ―底本ナシ ②顕証―底本「けんはう」

注釈

○それより後、ひまいとありがたくて、男も女も、かたみにあはれと心を交はし聞こえ給ひながら、行き会ふこといかたし―「それ」は、衛門督不在時に忍び込んだ折の逢瀬（二七）―（二九）。「男」は中納言、「女」は大弍女。思い

合いながらも、再び衛門督の目を盗んで逢瀬を交わすことは難しい。なお、「給ひ」と敬語が用いられるのは、〈新全集〉が説くように中納言を主に扱うため。

○夕暮れの紛れ、宵のほどほどは「夕暮れ」「宵」ともに、忍び通いしやすい時間帯。時分を表す「ほどほど」は、きわめて珍しい表現。「時など」の意か。

○夢の浮橋の心地して「浮橋」は川に筏や舟を並べ、その上に板を渡した仮設の橋。「夢の浮橋」は諸注の指摘するように『源氏物語』最終巻の巻名に拠るか。「浮橋」に「夢の」が冠されることで、一層頼りなさ・はかなさが増すと言われている。文脈としては『源氏物語』薄雲「心のどかならずち帰りたまふも苦しくて、『夢のわたりの浮橋か』とのみうち嘆かれて」の、光源氏が明石の君のもとへの通いがたさを嘆く場面を踏まえるか（〈新全集〉）。

○あはれに思し出でらる「中納言が大式女をしみじみとお思い出しになる、の意。

○衛門の督わざと来て「ここから衛門督と中納言の対面の場面に入る。「わざと」とあるので、別の用事で来て大式女の話をしたのでなく、娘を迎える件で挨拶に来た」とする（〈新全集〉の解釈に従う。以下、叔父・甥にあたる衛門督と中納言が「わきて親しう頼み交はず」と設定されていたこと（二一九）を踏まえての展開。

○かうかうのことなむ侍る「衛門督が大式女との馴れ初めを中納言に語る。【二四】～【二五】に該当。

○年ごろになりぬる人「長年連れ添った北の方（帥宮の娘）を指す。

○かかるありさま「新たに若い女（大式女）を娶ったこと。

○さるべきにや「挿入句。大式女との関係を前世からの宿縁と見なすことにより、自己の行為を正当化する。

○これも過ぐさむことに思ひ紛らはしてやむまじく「別の何かで紛らわして、大式女への愛情を捨て去ることは出来ないと、衛門督は言う。

○持て出でて一人目につく形で、の意。

○たづきなく寂しき蓬のもと「たづきなし」は生計の拠り所がない、の意。「蓬」は荒廃した邸宅の象徴。『源氏物語』の女君、末摘花などを踏まえた表現か。

○さても侍りぬべし―直訳するならば、「それはそれでよいでしょう」。具体的には、利得が生じないなら世間の自分への非難も少なからう、の意。

○豊かなるたつき求め顔に、ねぢげがましきに―「豊かなるたつき」は裕福な縁故、の意。ここでは富裕な大宰大式を指す。大手を振って大式女に通うのは財産目当てのように世間に映り、不体裁である（「ねぢげがまし」と、衛門督は躊躇する。

○長らへ侍らば、とてもかくても同じこととなるべけれども―大式女との関係が長く続いたならば、通おうが迎え取ろうが結局同じことになろうが、の意。

○大殿の対になむ迎へてむと思ひなりにたる―「大殿」は「大将のおほい殿」（二二四）（二二七）の邸。（桜楓）の説くように、この表現から「大将のおほい殿」と衛門督の父子関係が読み取れる。衛門督は思案の末、自邸に大式女を迎える考えに至ったと中納言に語る。

○うらもなう言ひ合はせ給ふも、いとほしければ―「うらなし」は裏表ない、「言ひ合はず」は相談する、の意。中納言は、自分と大式女の間接関係を知らず、隠し隔てなく語る衛門督を気の毒に思う。

○たちまちに迎へ給はむも、世の音聞き、今少しけんそ頭証に、もて出で顔にこそあらめ―衛門督の目論見を聞いた中納言の心情。「頭証」は、あらわで目立っている様。いきなり女を自邸に迎えるのはこれ見よがし（「もて出で顔」）で、なおさら目立って世間の耳目を集めるのではと危惧する。

○いみじう心入れて思ひ給へることを、「悪しかななり」と聞こえむも便なければ、「げにもさもあり」と聞こえ給ふ―衛門督がそこまで入れ込んでの案を否定するのも、この場にふさわしくないと中納言は思い、賛意を表明する。その判断の背景にはおそらく、自身が大式女と密通したことの負い目もあろう。

【三五】衛門督が大式女を迎える。中納言、衛門督北方に同情。

(担当…八島由香)

— 底本四二ウ⑧、新註二五一⑤、大系三〇一②、桜楓一二五⑭、新全集二五一⑥、全注釈七〇五—

六月十日余日、おほい殿西の対に、いみじうしつらひて渡い給ふ。「儀式見む」と思して、中納言とかくやすらひて見給へば、我もろともに立ち添ひて、車五つばかり、御前いとあまた、ことごとしうもてないて渡い給ふさま、いみじう心に入りげなり。「母の言ふらむやうにこよなき幸ひなりかし。心ざしいみじうとも、我はさこそえかうもてなさざらまし。思ひとどめていみじう思ふとも、かすかなる山里に隠し置きて、たまさかに忍びつつぞ通はまし。女のためいかに心細からまし」と思し続けて帰り給ふに、衛門の督御古里は道なりければ、門のほどに人影もせず寂しげなり。

〔校異〕①通はまし—底本「かよはし」

注釈

○おほい殿西の対—「おほい殿」は衛門督の父である「大将のおほい殿」のこと。その父邸の西の対屋を指す。連体修飾の「の」を省いた表現。衛門督は【三四】で中納言に語った通り、「大殿の対」に大式女を迎えたのである。

西の対に若い女性が迎えられる例は、『源氏物語』若紫巻の若紫(後の紫の上)、玉鬘巻の玉鬘、早蕨巻の宇治の中の君など、多く見られる。(全注釈)で指摘されているように、「西の対」に迎えられるのは、正妻の扱いではないということを示してもいる。

○いみじうしつらひて渡い給ふ—(衛門督は、西の対を)たいそう飾り立てて、大式女をお迎えなさる、の意。「いみじう」という表現から、衛門督が大式女にかなり入れ込んでいることがわかる。

○「儀式見む」と思して—中納言は、衛門督と大式女の婚礼の儀式を見よう、と思ひ立つ。ただし、「大将のおほい殿」

邸を訪れて儀式を直接見るのではなく、「大将のおほい殿」邸へ向かう行列を見ようとしたのである。

○中納言とかくやすらひて見給へば―中納言は、あちらこちらで牛車をとめて（迎えられる大式女の行列を）ご覧になると、の意。

○我もろともに立ち添ひて―衛門督自身が大式女に付き添っている様子。【三六】には「一つ車にて」とあるため、車に同乗していたことがわかる。

○車五つばかり、御前いとあまた、ことごとしうもてないて渡い給ふさま―【三六】では、先駆は二十人で、五輦の牛車には大式女に仕える女房たちが大勢乗っていたことが描かれている。『うつほ物語』蔵開上では、尚侍（俊蔭の娘）が女一宮のもとを訪れる際、「尚侍のおとど、御車五つばかりして参りたまへり」と描かれている。また、『栄花物語』卷三八「松のしづえ」では、源基子が実仁親王（後の東宮）を出産した後、女御となつて参内する際、「儀式有様いじめたし。車五六引きつづけて、いと心ことなり」と描かれている。このように、尚侍や女御に付き添う女房が乗る車が五、六輦であることを考えると、この場面の「車五つ」は、大式の娘という身の上には過ぎたる待遇であり、かなり仰々しいものであったことがわかる。

○いみじう心に入りげなり―以上の様子から、衛門督が大式女にかなり入れ込んでいることを、中納言は改めて実感したのである。

○母の言ふらむやうにこよなき幸ひなりかし―中納言の心内語。大式女の母である大式北方が言っているように、（大式女にご執心である）衛門督の妾妻になることは、この上のない幸運であろう、の意。ここで中納言が考える「幸ひ」とは、本来、邸に召されるのであれば、召人として扱われかねない中流階級の大式女が、衛門督の妻として西の対に迎えられるという、破格の扱いを受けていることをいう。↓【参考】

「母の言ふらむやうに」に相当する内容としては、大式北方が、衛門督の容貌などに触れつつ、上京したのに文すら寄こさない中納言（二五）と比較して、「かうねんごろにのたまふは、ありがたうこそあらめ」と、熱心に求婚してくる衛門督を好ましく思っていることが【二六】に描かれている。衛門督が大式女を自邸に仰々しく迎える様子を目

の当たりにして、大貳北方の發言を大貳女から聞いていた中納言はそのことを思い起こし、改めて大貳女の現状を「幸ひ」と捉えたのである。

○我はさこそえかうもてなさざらまし―中納言の心内語。私は、この（衛門督の仰々しい迎え取りの）ように大貳女を遇することはできなかつたであろう、の意。

○かすかなる山里に隠し置きて、たまさかに忍びつつぞ通はまし―（自分であれば、）目立たない山里に大貳女を隠し据えて、時折人目を忍んで通つたであろう、の意。中納言は大貳女に愛情があつたとしても、自邸に迎えようなどとは考えない。このような中納言の大貳女への考え方は、本作品には度々描かれている。【二六】の【参考】参照。

○女のためいかに心細からまし―（山里に大貳女を隠し据えて、たまに通つていような状態であつたならば、）大貳女はどれほど心細く思うであろうか、の意。中納言が大貳女を山里に隠し据えた場合の、彼女の気持ちを想像したものである。『源氏物語』薄雲巻には、源氏が月に二回ほどしか大堰の別邸に訪れないことを、心細く思う明石の君の様子が「冬になりゆくまゝに、桂（※大島本等の本文は「かはづら」）の住まひ、いと心細さまさりて、上の空なる心地のみしつ明かし暮らすを」と描かれている。

○衛門の督御古里は道なりければ―「衛門の督御古里」は、衛門督がかつて通つていた、正妻の邸のこと。区分初めの「おほい殿西の対」と同様に、連体修飾の「の」を省いた表現。中納言が自邸に帰る道の途中に、衛門督北方の邸があつたのである。ただし、【三六】で衛門督北方の者が、邸の前を通る前駆にご祝儀を渡したという描写もあり、大貳の邸から「大将のおほい殿」邸までの道の途中に衛門督北方邸があつたとも考えられる。

○門のほどに人影もせず寂しげなり―衛門督を迎える大貳女の華やかで賑わしい様子とは一変し、衛門督北方の邸には人影もなく寂しい様子である。

【参考】大貳女の「幸ひ」と苦惱―『源氏物語』と比較して―

本場面の「幸ひ」は、身分の高い衛門督に、中流階級の大貳女が妻妾として「大将のおほい殿」邸に迎えられることを、中納言が、自身の執着から離れて評価をした言葉である。

女が身分高き男との結婚によって得る「幸ひ」に関しては、『枕草子』の「位こそはなほめでたきものはあれ」章段で、「受領の北の方にて国へくだるをこそは、よろしき人のさいはひの際と思ひてめでうらやむれ。ただ人の上達部の北の方になり、上達部の御むすめ後にゐたまふこそは、めでたき事なめれ」と言及されている。大式女は北の方ではないが、破格の扱いで妻妾として西の対に迎えられる。これも中流階級の女の身の上としては、すばらしいものであったと考えられる。

このような女の「幸ひ」は、男君の愛情だけが頼みとなるため、「幸ひ」とされる当人の置かれる立場は、かなり不安定な、苦悩の伴うものであった。『源氏物語』に関しては、原岡文子「幸い人中の君」（『源氏物語 両義の糸——人物・表現をめぐって——有精堂 一九九一年〈講座 源氏物語の世界〉第八集 有斐閣 一九八四年初出）が、以前の物語では描かれることがなかった、「幸ひ」とされる女君、とりわけ宇治の中の君の苦悩と、世間の無責任な評価との乖離を指摘する。例えば、不遇な状況から匂宮によって二条院に迎えられた際、世人に「幸ひおはしける」（宿木）と噂され、お付きの女房には「匂宮が六の君と結婚しても、）なほわが御前をば幸ひ人とこそ申さめ」（宿木）と評されている部分などである。

これにくらべて、本場面で、中納言から第三者的に「幸ひ」と捉えられる大式女は、結婚相手の衛門督の愛情に苦悩することはなく、他ならぬ中納言を密かに慕い続け、後に中納言の子までなして、別の苦悩を抱え込むことになる。『源氏物語』で「幸ひ人」と称される中の君と同じような境遇でありながら、全く異なる苦悩が描かれていくところに、大式女の物語のおもしろさがあるのではないだろうか。

かつて中納言が筑紫に滞在した際、大式が中納言と娘との結婚を夢見て、「年に一夜、宵の間にも思し出でさせ給はば、この世の幸ひに思ふ給へて」（巻二【一三】）と述べた「幸ひ」は、大式女自身の願いであったのかもしれない。このように考えると、本場面の大式女の結婚が、後の当事者である中納言によって「幸ひ」と評されてしまうのは、皮肉なものだと捉えることもできる。

【三六】中納言、衛門督北方邸を窺い、その声を聞く。

—底本四三才⑩、新註二五二②、大系三〇一⑨、桜楓一二六⑤、新全集二五二⑨、全注釈七〇六—

「いで、あはれ」。過ぎがたうて下り給へれば、簾上げて人々出で涼むなるべし。声々、ただ今宵迎へらるることをぞ言ひあさみ、心憂がりける。奥の方より、老いしらへたる声したる人出で来て、

「ただ今ぞ渡り給ひにける。殿はこの夕暮れに迎へにおはしまいて、一つ車にて、二十人の御前、車五つ簾上げて、いみじう乗りこほれ、御まうけなど心に入れてこそ思し騒ぐなれ。

ここにも御前に被け物などしけり。あはれあさましや。目の前に、さはかかることもありけるは」

と言ひ続けて、泣くさまのいみじきは、御乳母などやうの人なるべし。いとど人々も聞きあさみ妬がるを、御みづからも端つ方におはするなるべし、

「さはれ、聞きにくくかうな言ひそ。言ふにもよらぬものなり」と、忍びやかにのたまふなるけはひ、あてやかなり。

「いでや、年ごろもかうのみものを思し召いて、埋もれ過ごさせ給ひての果て果ては、つひにかかることも出で来ぬるぞかし。なほ少し、人は言ふべきことも仰せられたるこそよけれ。いとあまりなると見奉る積もりの、かかる目も御覧するぞかし」

と言ふなれば、

「泣くにしとまるものならば」

(担当…八島由香)

とうち嘆きたる、少し大人び過ぎて、忍びやかにあはれなり。すずろにしみじう涙ぐましく
心まさりして、「我立ち寄りてとぶらひもやせむ」と思しけれど、ことごとくなく嘆き入り思ひ
騒ぐに、ゆくりなうさし出でたらむもおもなく、衛門の督の聞き給はむところも、例れいさもあら
ぬに、迎へ騒ぐるを見置きて、ここにとぶらはむも、もどき顔に便なければ、立ち出で給ひて
帰るかへるまに、「衛門中納言の督は、なほ思ひのままに、浅はかにものし給ふ人なりや。げに人柄は若
く盛りに、むなしき空に満ちぬばかりいみじきことを思ひわび、世の常ならぬ心にだに、いと
にくからずおほゆる人なれば、まして、いとかうもの思ひ入れざらむ人は、心を惑はし給はむ
もことわりながら、やがてかき移ろひても出で給ふこと、いと心憂きことなりや」

〔校異〕①おもなく―底本「おりなく」②帰る―底本「かはる」

注釈

○「いで、あはれ」―【三五】の「門のほどに人影もせず寂しげなり」という衛門督北方邸の様子に感じ入った中納言の心情。彼の心情に、語り手が同化している表現とも取れる。

○過ぎがたうて下り給へれば―中納言は、さびしげな邸の様子にそのまま素通りすることもできず、牛車から降りて衛門督北方邸を、そつとのぞき込む。

○簾上げて人々出で涼むなるべし―簾を巻き上げて、端近で涼んでいるから、女房達の話し声がよく聞こえるのである。なお、【三五】には「六月十日余日」とあり、晩夏といえどもいまだに暑さが続く状況であったことがわかる。

○声々、ただ今宵迎へらるることをぞ言ひあさみ、心憂がりける―今宵、大弍女が「大将のおほい殿」邸に迎えられたことを、女房達が情けなく思つて口々に言い合っている声が、はっきりと聞こえてくる。

○老いしらへたる声したる人―おいはれた声をしている年を取った人、の意。あまりにも衛門督北方に肩入れした言動

から、後文で中納言に衛門督北方の乳母かと推察されている。

○殿はこの夕暮れに迎へにおはしまいて、一つ車にて……以下は、大式女に対する衛門督の入れ込みようを報告する老女房の言葉。「殿」は衛門督のこと。衛門督がわざわざ大式郎へと赴いて、大式女と同乗して「大将のおほい殿」邸に迎え入れたのである。また、この行列は夕暮れの頃であったことがわかる。

なお、身分の異なる男女が人前で同車している例としては、『大鏡』に、「帥宮（＝敦道親王）の、祭のかへさ、和泉式部の君とあひ乗らせたまで御覽せしさまも、いと興ありきやな」（兼家伝）がある。

○二十人の御前—二十人の前駆が行列を先導している様子。前駆の人数をわざわざ記して、次の「車五つ」と並記していることから、この前駆も大式の娘という身の上に対して、かなりの人数であったことが考えられる。前区分【三五】の「車五つばかり」の項目参照。

○車五つ簾上げて、いみじう乗りこぼれ—大式女の女房が五輛の牛車一杯に乗り込んでいる様子。【三五】の「車五つばかり」で、「大将のおほい殿」邸に渡っている様子について報告したもの。「乗りこぼれ」ているのは、女房達の袖口や裾などの、いわゆる「出だし衣」か。通常は簾を上げないが、ここではわざと上げることで、それだけ付き従う女房がいることを見せているかとも考えられる。『栄花物語』巻一「月の宴」では、為平親王の船岡山での子の日の遊びの際に、「后宮の女房、車三つ四つに乗りこぼれて、大海の摺裳うち出したるに」という描写がある。

「車五つ」の女房が、大式の娘という身の上には過ぎたるものであることは、前区分【三五】の「車五つばかり」の項目参照。一輛に四人乗っているとすれば、二十人の女房ということになる。類似する例として『落窪物語』巻二の道頼（この場面では衛門督）が北の方（女主人公）に仕える女房達に賀茂祭見物をさせる場面、「車五つばかり、大人二十人、ふたつは童四人、下仕四人乗りたり。男君具したまへれば、御前、四位、五位いと多かり」が上げられる。牛車五輛に女房が大勢乗っていて前駆が多いという点、さらに「衛門督」という官職名が関わってくる点など、当該場面に似ている。

○御まうけなど心に入れてこそ思し騒ぐなれ—（衛門督様は）迎え取りの宴で振るまうご馳走などを、熱心に賑わわしく

準備しているようです、の意。話者である「老いしらへたる声したる人」が、衛門督方の準備に力を入れている様子を推察して述べている。

○ここにも御前に被け物しなどしけり―衛門督北方側からも祝儀を前駆に与えた、という内容。衛門督北方は、夫から事前に大式女を迎えることが知らされて、被け物を用意していた模様である。

○あはれあさましや―大式女の盛大な迎え取りに対する、「老いしらへたる声したる人」の悲憤。衛門督北方に夫から、大式女を迎えるという説明はあつたとは思われるが、このような仰々しく華々しいものであるとは思ひも寄らなかつたのであろう。大式女を迎える儀式が立派であればあるほど、衛門督北方の世間体は悪くなるとともに、彼女の悲しみも一層深まることになる。

○泣くさまのいみじきは、御乳母などやうの人なるべし―衛門督北方を思い遣り、泣いている「老いしらへたる声したる人」は、より近い乳母などであろうか、と中納言は推察する。

○人々―衛門督北方にお仕えする女房達。

○御みづからも端つ方におはするなるべし―衛門督北方も端近あたりにいたのであろう、の意。立ち寄って邸内を窺う中納言は、当該区分冒頭の「簾上げて人々出で涼むなるべし」とあることから、端近で涼んでいるのは女房だけだと思つていた。しかし、衛門督北方の声を耳にして、ここで初めて屋敷の主人も端近で涼んでいたことに気がついたのである。これは『源氏物語』若紫巻で「今日しも端におはしましけるかな」と、光源氏に垣間見られる尼君と通じる設定である。

○言ふにもよらぬものなり―言つてもどうなるものでもないのです、の意。「よらぬ」の「よる」は、事柄などに応じると、という意味に取つた。乳母かと思われる人や女房達が悔しがつてあれこれと言つたのを、衛門督北方は、やんわりとたしなめる。

○忍びやかにのたまふなるけはひ、あてやかなり―（衛門督北方が）ひっそりとおっしゃっている様子は、高貴な感じである、の意。衛門督北方が帥宮の娘であるという出自だけではなく、声の様子や控えめな発言の内容なども含めて

「あてやか」だと中納言は感じるのである。直前で描かれる、乳母かと思われる人や女房達の泣いたり、悔しがったりする様子と対比されることで、よりいっそう「あてやか」な様子が際立っている。

○年ごろもかうのみものを思し召いて、埋もれ過ごさせ給ひての果て果ては、つひにかかることも出で来ぬるぞかし―乳母かと思われる人の、衛門督北方への発言。中納言が「あてやか」だと評価した衛門督北方の控えめな発言に反駁する。そのように常に控えめで自己主張をしないから、衛門督に顧みられることなく過ごした結果、このような大式女と衛門督の仰々しい迎え取りを目の当たりにするはめになったのだ、と結論づける。

○いとあまりなると見奉る積もりの、かかる目も御覽するぞかし―乳母かと思われる人は、衛門督北方が自己主張をすべきところでせず、夫の女性関係をとがめないという控えめすぎる態度でいつづけた結果、このようなつらい目に遭うことになったのだ、とする。直前の「なお少し……仰せられたるこそよけれ」を受けた内容。

この「あまりなる」の使われる状況に類似するものとしては、『源氏物語』若菜上巻で源氏と女三宮の婚儀を寛容な態度で迎える紫の上に対する女房達の反応が「中務、中将の君などやうの人々目をくはせつつ、『あまりなる御思ひやりかな』など言ふ」と描かれている。また、真木柱巻では源氏が、自身の玉鬘へのあまりにも抑制的な行動が玉鬘と髻黒の結婚を招いたとして、「わがあまりなる心にて、かく人やりならぬも」と捉えている例がある。

なお、諸注は「いとあまりなる」を、衛門督の女性関係と解く。

○「泣くにしとまるものならば」―『古今集』「散る花の泣くにしとまるものならばわれ鶯に劣らましやは」(巻二・春下・一〇七・藤原治子)に拠った表現。桜が散るのを悲しみ、それを惜しむ気持ちに詠んだ歌が、失われていく男性の愛情を悲しむものとして、口ずさまれている。ここでは衛門督が大式女に夢中になってしまい、顧みられることもない我が身を嘆くものとなっていよう。この歌を口ずさむ衛門督北方の様子は、「心まさりして」と中納言に好印象を与えていることから、夫に顧みられない妻の様子が美的に描かれた場面と考えることができる。後に、中納言は巻五で当該場面を回想することによって、強い関心を抱き、彼女を垣間見ることになる。

同歌の引歌は、管見の限り、本作品と『夜の寝覚』のみに用例が見られた。『夜の寝覚』巻五(右大臣は)涙ぐみ

て、いとまめやかに恨みきこえたまへば、(寢覚の君)『泣くにしとまるものならば』と、うちほほゑみたまへる顔の
にほひ、なにのきよらあるべくもあらず……面瘦せたまへるしも、うつくしうらうたげなることまさりて見えたまふ
を』がある。当該場面同様に、男女関係の中で当該歌を口ずさむ女君が美的に表現されている。

○少し大人び過ぎて、忍びやかにあはれなり―(古歌を口ずさむ衛門督北方の声から窺える様子は)少し女盛りの年齢を
過ぎていて、控えめでいじらしい感じである、の意。(新全集)は、「あはれなり」を中納言の心情として「しみじみ
と心にしみて気の毒である」と訳しているが、直後の「心まさりして」と合わない。

○すずろにのみじう涙ぐましよう心まさりして―(中納言は)なんとということなくやたらと涙ぐましく思い、思っていたよ
り(衛門督北方が)好ましい女性だと思つて、の意。

○ことごとなく嘆き入り思ひ騒ぐに、ゆくりなうさし出でたらむもおもなく―(衛門督北方達が)他のことなど全く考え
られず深く嘆いて落ち着きを失つているところに、突然自分が出しゃばるのも厚かましく、の意。「ことごと」は「異
事」のこと。衛門督北方にお見舞いをしない理由の一つ目として考えられている内容。

○迎へ騒ぐる―本文はこのままにしたが、動詞「騒ぐ」の活用が乱れているととるべきか。あるいは(大系)の補注が、
東北大本や丹鶴本が「さわける」となっていることに基づき、指摘するように、草体の「介」と「久」の誤りの可能
性もある。各注釈書の本文は、(新註)は「迎へ騒げる」(底本は丹鶴本)、(大系)は「迎へさはくる」、(桜楓)は
「迎へさはくる」、(新全集)は校訂して「迎へ騒げる」、(全注釈)は「迎へさわくる」としている。

本文を尊重して「迎へさはくる(迎へさばく)」と取ると、迎えて取り扱おうと解せるが、「さばく」の同時代の用例
が見当たらず、不審。

○衛門の督の聞き給はむところも……もどき顔に便なければ―衛門督北方にお見舞いをしない理由の二つ目として考え
られている内容。衛門督が別の女を自邸に迎え入れた当日に、衛門督北方にお見舞いと称して訪問するのは、あた
かも衛門督を非難しているかのよう受け取られてしまうと、中納言は考えるのである。

○立ち出で給ひて帰るまに―(中納言は衛門督北方邸から)立ち離れて、(自邸に)帰る道すがらに、の意。以降、自

邸に向かう牛車の中で考えた内容となる。

○衛門の督は、なほ思ひのままに、浅はかにものし給ふ人なりや―衛門督は、やはり自分勝手な行動をする、軽率でいらつしやる人だなあ、の意。「なほ」の語から、中納言が衛門督の人柄を以前からそのように捉えていたことがうかがえる。

○げに人柄は若く盛りに……いとにくからずおぼゆる人なれば―大式女の魅力的な人物像を述べている部分。文頭の「げに」から「なれば」で、後文の、衛門督が大式女に入れ込んでしまうのは「ことわり」だとする前提となっている。

○人柄は若く盛りに―（大式女の）人となりは、年若く今が盛りで（美しく）、の意。唐土から帰国した中納言が、初めて大式女と逢った時に「十七八のほどなるべし」（卷二【一三】）と推測している。当該場面は、その翌年。衛門督北方の「少し大人び過ぎて」という状況と対比されるものでもある。

○むなしき空に満ちぬばかりいみじきことを思ひわび―大式女の自分（中納言）に対する思いは、まるで古歌の「むなしき空に満ちぬ」のように、やり場のない募る恋心に苦しんでいて、の意。「むなしき空に満ちぬ」は、『古今集』「我が恋はむなしき空に満ちぬらし思ひやれども行く方もなし」（卷一一・恋歌一・四八八・詠み人知らず）に拠った表現。大式女の自分に寄せる思いの強さを表現したものの。

本作品には、当該例を含め、卷二【一一】「行方も知らず果てもなく、むなしき空に満ちぬばかりに眺め入り給へるに」と【四三】「思ひ出でらるる恋しさの、むなしき空に満ちぬる心地のするままに」、卷四【四四】「常よりも心碎くる寢覚めは、むなしき空に満ちぬる心地して、月の顔つくづくと眺むるに」の全四例の引歌表現があり、積極的にこの歌を引いていると考えられる。以上は、中納言から唐后に対する思いの強さを表現したものとなっているが、当該例は、他者の自らへの思いを示す、希少な例である。

『源氏物語』では、亡き大君に対する薫の思いが「なほ、行く方なき悲しさはむなしき空にも満ちぬべかめり」（東屋）と表現され、匂宮の浮舟への募る思いが「行く方知らず、むなしき空に満ちぬる心地したまへば」（浮舟）と表現

されている。

○世の常ならぬ心にだに、いとにくからずおぼゆる人なれば―女性に夢中になりやすい世間一般の男とは異なる、この私（＝中納言）でさえも、好ましく思える人（＝大式女）なので、の意。中納言は、自らが世間一般の男性とは違うという思いが強くなる。卷二【一二】で寝所に大式女が差し入れられた際には、「わが心を世の常に推し量りてするならむかし」と、契りなき一夜を過ぎ、卷三【五一】の皇女降嫁の話に対しては、「わが心を世の常に推し量らせ給ふなるべし」と、遠回しに断っている。

なお、当該箇所と似ている中納言の大式女への心情として、卷二【二三】の筑紫滞在時には「見捨てがたう思す思す、『我ながらもいとあやしう、夢のやうにもあるかな』と思しつつ」と描かれている。

○いとかうもの思ひ入れざらむ人―まして私（＝中納言）のようには、物事を深く考えない人（＝衛門督）、の意。中納言が自身を物事を深く考える人物だとするのは、何を理由としているかは示されていない。しかし、大君剃髪の記事が収拾していない筑紫滞在時の卷二で、大将大君をはじめとする左大将の心情を慮って、大式女との逢瀬を思い留まるなど、周囲の人物との関係を踏まえた行動を取るよう心がけている様子がうかがえる。このような中納言と、衛門督北方の心情を考えない衛門督が対比されている表現である。

○心を惑はし給はむもことわりながら―衛門督が大式女に夢中になって入れ込んでしまうのは、もつともなことである、という内容。前からの流れを踏まえると、世の常の男性とは違う自分でさえ大式女をかわいいと思うのだから、思慮の浅い衛門督はなおさらである、となる。

○やがてかき移るひてもて出で給ふこと、いと心憂きことなりや―衛門督が衛門督北方から早々に他の女に心を移し、（そのことを）世間に知らしめてしまったのは、まったく薄情だ（と中納言は思った）、の意。大式女の仰々しい迎え取りは、衛門督が衛門督北方をもはや顧慮しないと知らしめることになる。それを考えると、中納言は叔父である衛門督を薄情だと思ひ、衛門督北方を思いやって胸を痛めるのである。